

2023年10月15日 主日礼拝

説教題「手ぶらでは帰れない？」ルカによる福音書 15章 11～32節

主任牧師 加藤 誠

**「ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、走り寄って首を抱き、接吻した。」(ルカによる福音書15章20節)**

「ハイデルベルク信仰問答」の問1の答えには「この方（キリスト）はご自分の尊い血をもって、わたしのすべての罪を完全に償い…」という言葉がでできます。この「わたしの罪を完全に償い」とはどういうことでしょうか。わたしは「キリストの真実な愛から漏れる者は一人もいない」と受け取ります。キリストの愛は「百番目の羊」、群れから迷い出た不出来な羊にも、他の羊と変わることなく注がれているのです。

ブロックホルストという画家が描いた「良い羊飼ひ」という絵があります。左手に杖を持ち、右手に小羊を抱いた主イエスが羊たちの先頭を歩いている。よく見ると小羊の親羊らしき羊が主イエスの前に出て、抱かれた小羊を見上げていて、小羊を見つめる目はそのまま主イエスの顔を見つめているのです。つまり、迷い出た小羊に注がれる主イエスの完全な愛のまなざしの中に自分も置かれている。そのことを喜びながら、主イエスの隣りを歩く羊の姿です。百番目の不出来な羊に注がれる主イエスの愛のまなざしは、私たち一人ひとりに注がれているまなざしなのです。

この主イエスによって示された神の真実の愛は、旧約と新約とで「礼拝」の概念を百八十度変えるものとなりました。旧約聖書では、神の戒めに背いた人は手ぶらでは神の前に出られないと考えられていました。私たち人間同士の関係でも似たようなことが言えるように思います。ある人の信頼を裏切ってしまった者がもう一度信頼関係を築くには、その裏切りを「深く反省しているしるし」が求められます。「そんな大したことではない」という了見なら、簡単に同じ過ちが繰り返されてしまうからです。そのため旧約聖書は、神の戒めに背いた人に対し「深い反省のしるし」として動物の犠牲、時にはその人自身の命の犠牲を求めたのでした。つまり人間の側の「深い反省」が礼拝を成り立たせる条件だったのです。

それに対して新約聖書は、「神に対する裏切りは動物の犠牲でも、人間の自己犠牲でも、償いきれるものではない。ただキリストの十字架において示された神の恩寵（深い慈しみと赦し）のみが、私たちの裏切りを覆う。そして、この神の恩寵から漏れる人は一人もいない！」という福音を宣べ伝えます。そこでは、私たち人間の「神の真実の愛」「主イエスによる完全な償い」が私たち人間の「深い反省」に先立ちます。私たちの側の「深い反省」があつて礼拝が成り立つのではなく、「神の真実の愛」によって私たちは礼拝に招かれ、「主イエスの完全な償い」に対する応答、感謝として、賛美をもって新しい命を生きる者とされるのです。

先ほど、父の財産をすべて食いつぶしてしまった「放蕩息子のたとえ」を読みま

した。父の財産を手に入れた弟はほどなく破綻します。自分で苦勞して働いて得たのではない金は人を墮落させるからです。彼は豚のえさとなるいなご豆で腹を満たしたいと思ったけれども、その豆さえくれる人もいない、身も心もボロボロになるところまで落ちに落ちます。しかしその時、彼は父のあたたかな愛を離れては生きられない自分に気づき、父の家に帰る決心を与えられたのでした。

一方で、父は弟の口から「財産を分けてくれ」という言葉を聞いた時、どう思ったのでしょうか。「自分はどこでこの子の育て方を間違っただろうか」。親はこういう時、自分を問われるものです。この時、父は息子の言葉に痛みをおぼながら、そして財産を手にした弟がどのような道を歩むことになるのかを予想しながらも、その要求をそのまま飲んだのでした。「甘い父親だ」と言われたら、そうかもしれません。けれども父は、弟が自らの愚かさを思い知る中でほんとうに大切なものに気づいていくことに賭けたのかもしれない。そして「神さま、この息子をあなたの手に委ねます。この息子がたとえ死の影の谷に行くときにも、あなたの愛で覆い、守り、導き、あなたの家に連れ戻してください」と祈りながら息子を送り出したのではないかと思うのです。だからこそ、父は息子が家を出て以来ずっと毎日、家の外で祈りながらその帰りを待ったのでした。そしてある日、遠くに息子の姿を見つけるや否や、走り寄って首を抱き、接吻したのでした。

しかしながら兄から見ると、この弟はとんでもなく浅はかで愚かで許しがたい存在でした。父の大切な財産を浪費して大損害を与えたにもかかわらず、手土産一つ持って帰ることなく手ぶらで帰ってきた弟。息子の資格を取り上げ、雇い人からやり直させるべきでなのに、なぜ父はその帰りを喜び、宴会まで開くのか。弟への怒りは父への怒りとなり、兄は家の中に決して入ろうとしなかったのでした。

その兄に父は言います。「お前の弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかった。喜び祝うのは当たり前ではないか」と。

この「放蕩息子のたとえ」においては、17節「彼は我に返って言った」の言葉が一つの大切なポイントではないかと思えます。口語訳は「本心に立ちかえって」と訳していて、直訳は「彼は彼自身に返った」です。「本来の自分」「自分が生きるべき場所に改めて気づいた」ということでしょう。弟は自分の愚かさと世間の冷たさをとことん思い知らされた時、「一人では生きられない自分」「父のあたたかな愛を離れては生きられない自分」に気づくのです。こういう時、私たちは「手ぶらでは帰れない」と考えます。「悔い改めにふさわしい、何か手土産が必要なのではないか」と。しかし父が求めるのは手土産ではなく、弟が父の家以外に自分が生きられる場所はないこと。父の愛を離れては生きられない自分に気づいて、手ぶらでいいから、そのまま父のもとに帰ってくることであったのです。そして父は、そのことに気づいた弟を「死んでいたのに生き返った」「いなくなっていたのに見つかった」と言って心から喜んだのでした。今朝この礼拝に招かれた私たちの神さまに向かう信仰に先立って、まず主イエスの真実の愛が一人ひとりに注がれていることを深く感謝し、それぞれに神さまのもとに立ち帰る歩みをささげていきたいのです。